

アカアマダイ栽培基礎調査

(新規栽培対象技術開発事業)

堀 玲子

1. 研究目的

将来のアカアマダイの種苗放流を目指し、試験的な種苗生産及び中間育成基礎技術の開発を行う。また、漁獲物の体長組成や生物調査から、漁業実態や生態を把握する。

2. 研究方法

(1) 中間育成試験

水産総合研究センター宮津栽培漁業センターで種苗生産されたアカアマダイ稚魚を用いて、中間育成を実施する。

(2) 種苗生産試験

出雲市平田地先で漁獲された活アカアマダイを用いて採卵、種苗生産を行った。また、ウイルス性神経壊死症(VNN)対策として親魚のPCR検査を実施し、ウイルスフリーの親魚から得られた受精卵のみを種苗生産試験に供した。

(3) 生物測定調査

JFしまね平田支所佐香出張所において市場調査を実施し銘柄別の体長組成を把握するとともに生物調査から銘柄別の平均体重等を把握した。

3. 研究結果

(1) 中間育成試験

宮津栽培漁業センターにおいてVNNが発生したため種苗配付が中止され、中間育成試験を実施することができなかった。

(2) 種苗生産試験結果

出雲市及びJFしまね平田支所の協力により、10月6及び12～13日に一本釣り及び延縄で確保された活魚を用いて採卵した。受精卵は親魚のウイルス検査結果が判明するまで個別管理し、陰性が確認された親魚から得られた受精卵48,000粒を種苗生産に用いた。なお、検査の結果、全体の約2割の親魚がVNNウイルスを保有していることが明らかとなった。受精卵は10月9日(生産1回次)及び15日(生産2回次)にそれぞれ3t円形水槽に収容した。1回次の収容卵数は16,000粒、孵化尾数13,000尾、孵化率は81.2%であり、2回次は収容卵数32,000粒、孵化尾数15,000尾、孵化率46.9%であった。仔魚は日齢3に開口し、タイ株S型ワムシ及びS型ワムシを給餌したところ、活発な摂餌行動が観察された。しかしながら、いずれの回次においても日齢10までに急激に減耗し、その後も生残率が低下し続けたため飼育を中止した。

次年度以降の種苗生産技術開発においては、水温、飼育密度、餌料密度等、適正な飼育環境を見いだすことが重要と考えられた。

(3) 生物測定結果

佐香出張所におけるアカアマダイの銘柄は、昨年度と同様に3S～LLの6段階あり、各銘柄とも1箱3kgであった。各銘柄の平均全長は、3S:244mm、2S:277mm、S:307mm、M:335mm、L:397mm、LL:437mmであり、各銘柄の全長は昨年度の値との差は見られなかった。

4. 研究成果

平成18年3月に高知市で開催された平成17年度アカアマダイ栽培漁業検討会において、種苗生産試験結果について報告した。